アンデッドですが、なにか？

～ゆ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

爆発する教室！転生する生徒たち！何故かそれに巻き込まれる一般人！記憶喪失！多分全部Ｄのせい！おのれ存在Ｄ！

って感じのアレです。

原作を読んでいる前提で書いてしまっているのでご注意ください。

※夜間モードで本文を閲覧した場合、通常時には白く表示され読むことが出来ない文章が黒く浮き出てしまいます。仕様上どうしようもないので見なかったことにしておいてください。

目　次

1　土葬への直行便 ―― 1
2　人の顔見て悲鳴をあげるな無礼者 ―― 5
3　死体の生存本能なめんなよ！ ―― 7
4　他言語って難しいよね ―― 10
5　腹ごしらえヨシ！　レッツスニーキングミッション!! 13
6　伝説の傭兵がダンボールを選んだ理由 ―― 16

1　土葬への直行便

唐突だが、気がつくと真っ暗などこかに寝かされていた。
なぜこんなところにいるのか思い返してみても、自分自身に関する記憶だけがすっぽりと抜け落ちている。
思い出せるのは、日本での一般常識であろうもの。
こんな状況になる前に、誰かに会ったこと。
その人物が、『D』と名乗っていたこと。
それだけだ。
……まあ取り敢えず、状況の把握を試みよう。
手を伸ばす。
すぐに手が天井に触れ、硬質な音を立てた。
横に手を伸ばしても同じ結果に終わった。
どうやら自分は自らより少し大きい程度の長方形の箱のようなものに閉じ込められていることがわかった。
次は、この空間に自分以外のものがないか探してみる。
手探りで辺りをべたべたと触っていると、自らの周りに乾燥したなにかが大量に敷き詰められていることに気がついた。
一つを手に取って触ってみる。
小さな円形の物に薄いものが無数に生えている。
引っ張るとポロポロと簡単に抜け落ちた。
……花？
コスモスの花を思い浮かべながらいじくりまわすと、その疑惑は確信に変わった。
少し形が違うため、コスモスではないようだが、花であることは間違いないようだ。
状況を整理してみよう。
人が入る大きさの箱と、その中に敷き詰められた大量の花。
そしてその中央に横たわる自分。
……。
どう考えても棺桶しかあり得ません本当にありがとうございまし

た。
ちょっと意味が分からない。
どうして自分は棺桶なんかの中で寝かされているのだろうか。
……。
考えてもらちが明かない。
そもそも記憶がないのにこんな状況に陥った理由に思い至ることは不可能に近いのだ。
早急にここからの脱出を試みよう。
不思議と息苦しさは感じないし、謎の安心感があるが、このまま棺桶の中で生涯を終えるわけには行かないのだ。
確かに生涯を終えてもお膳立てバッチリだが、さすがに嫌だ。
とにかく嫌だ。
蓋を全力で押し上げる。
開かない。
重い。
恐らく既に土に埋められているのだろう。
ますますお膳立てバッチリである。
こんなことをしでかしてくれた立役者に拍手を送りたい。
ブラボー。ついでに一発殴らせろ。
《熟練度が一定に達しました。スキル〈怒ＬＶ１〉を獲得しました。》
唐突に頭の中に声が聞こえた。
機械のように、一切感情の感じとることの出来ない声だ。
……それにしても、スキル？
まるでゲームだな。
……で？
なんだ？
おちょくってるのか？
記憶のなかのＤが嘲笑ったように感じた。
犯人はきっとＤに違いない。
自分の直感がそう言っている。
もう一度会ったら本当に殴ってやろう。

と怒りをたぎらせていると、体に力がみなぎるような感覚を覚えた。
なんだか分からないが、今なら行けるかもしれない。
もう一度全力で押し上げる。
すると今度はゆっくりと蓋が持ち上がり始めた。
それに合わせるように腕がミシミシと悲鳴をあげる。
腕への負荷が限界を迎えている。
それでもここでやめるわけには行かない。
そのまま力を込め続ける。
届けこの想い。

届かなかった。
少しだけ持ち上がったのだが、腕の「メキッ」という異音に驚いて力を緩めてしまった。
結果。
無情にも蓋は閉じた。
まぁそりゃそうか。
ゲームみたいな世界とは言え、ただの人間が分厚い木の板と大量の土を腕の力だけで持ち上げられる訳がない。
致し方なし。
……さて、と。
諦めてふて寝でもしようか。

一体どのくらい経っただろうか。
寝ていたため分からないが、蓋の上の方から土を掘る音が聞こえてきた。
助けが来た！
掘る音はどんどん近くなってくる。
このまま待っていればきっとこの誰かが助けてくれるはずだ。
爆睡しておいて今更なんだという話ではあるのだが、限られた酸素を無駄にしないためにじっとその時を待つ事にした。

☆　Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　主人公　→　とある泥棒２人組　☆

「聞いてねぇ！　聞いてねぇよ！　なんで生きてるんだよあのガキ！」

「つべこべ言ってねぇで足を動かしやがれ！」

泣き言を言いながら走る相棒に怒号を投げながら走る。

光源がランプしかない中で夜道を走るのは危険だが、それ以外に恐怖を紛らわせる方法が無かった。

濁りきった目、動く度に軋む体、うわ言のように何かを呟きながら伸ばされる小さな手。

思い出すだけで吐き気がしてくる。

「もしかしてあれがアンデッドって奴なのか!?」

「そんな訳が……ッ」

相棒の馬鹿げた想像を否定しようとして口を噤む。

アンデッドはおとぎ話の存在だ。

そんな事はスラムのガキだって知っている。

しかし先程のアレは言い逃れができないほど、アンデッドと呼ばれる怪物に酷似していた。

「訳わかんねぇよ！　訳わかんねぇよ!!」

「いい加減黙りやがれ!!」

あの小さな影の幻影を振り払うように、俺たちは町への道を走り続ける。

今夜あったことは二度と忘れることが出来ないだろう。

だが、この事を誰かに語れる度胸があるほど、俺たちは非凡な人間ではなかった。

2　人の顔見て悲鳴をあげるな無礼者

土を掘る音が近づくにつれて、話し声が聞こえるようになって来た。
声がくぐもっていて話の内容は聞き取れないが、恐らく男性2人組であろうことは分かった。
……ところで、どうしてこの2人はここを掘っているのだろう。
埋め立て地の真上に『←おたから←』みたいな看板でも立っているのだろうか。
……いやないわ、流石にありえないでしょ。
そんな事を考えていると、ガッと硬質な音が聞こえ、暫くしてから土を掘る音が止んだ。
ガッは十中八九スコップが棺の蓋に当たった音だろう。
やっと土葬の危機から逃れる事が出来る喜びに浸っていると、ゆっくりと棺の蓋がずらされた。
僅かな隙間から暖かい光が差し込んでくる。
少しして完全に蓋が退けられ、ランプでこちらを照らすワクワク顔のおじさん2人と目が合った。
気弱そうな顔つきの男といかつい髭面のおっさんだ。
なんでそんなワクワク顔なのかは分からないが、もしかしたら宝探し気分だったのかもしれない。
まあ人命救助と言いつつも穴を掘るということに快感を覚えていた可能性もある　し、あまり深く考えないようにしよう。
そうだ、まずはお礼をしよう。
「……えっと、ありがも……ありがとうのざ……ございます……」
くそほど噛んだ。
見ろ、とんでもない噛み方過ぎて2人が固まってしまった。
ちくしょう、どうやら記憶を失う前の自分はコミュ障気味だったらしい。
まあいいや、とりあえずずっと同じ体勢でいたせいで体を動かしにくいし、ついでに起こしてもらおう。

「あの……とりあえず……起き上がるの手伝ってくれませんか……？」
そうやって掴んでもらうために差し出した手は、その役目を果たすこと無く宙を彷徨う事になった。
２人が言葉にならない悲鳴をあげながら転がるように逃げ出したせいだ。
ええ……？
なんだあの見てはならないものを見たような逃げ方は。
流石に失礼だと思うんだが？
憤慨しつつ、行き場の無かった手で固まりきった体を無理やり起こす。
「……おやぁ？」
その時、ランプの光に照らされた自らの手が、まるでとっくに死んでいるかのように青白いことに気がついたのだった。

☆　Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　主人公　↓　???　☆

暗い部屋の中、唯一の光源である画面から激しい戦闘音が漏れる。
スキンヘッドの男性が巨大なモンスターの攻撃を躱しながら攻撃を繰り返し、ボスモンスターの体力ゲージが一瞬で削り取られる。
クエストクリアの文字が画面に大きく表示され、画面の前の人物がコントローラーを置き小さく息を吐く。
少ししてコントローラーを握り直すと画面が切り替わり、何人かの赤子や卵そして地中の棺の映像が映し出された。
「さぁ、準備完了です。私のクラスメイト達と小さなイレギュラーは、どのように私を楽しませてくれるのでしょう」
その人物は表情を一切変えないまま、小さく笑い声を漏らした。

3　死体の生存本能なめんなよ！

穴の縁に腰掛け、ため息をつく。
蒼褪めた肌は、つねっても痛みを発する事はなかった。
そして何よりも。
手首に人差し指を添え脈を測ろうが、首筋に指をあてようが、胸に手を当ててみようが、温かさも鼓動も感じ取ることはできなかった。
つまりだ。
自分は既に死んでいるのではなかろうか。
うそぉん……
　どうしてこんな状況に陥っているのだろうか。
そして死んでいるのならなぜこうやって意識があるのだろうか。
これがもしかして噂に聞く『哲学的ゾンビ』ってやつなのかな字面はそれっぽいが違う？
にしてもこれからどうすっぺ……。
……。
よし、変に考えるのをやめよう！
考えても現状は好転しない！
なに自分？
どう考えても自分が死んでいて困る？
自分、それは死をマイナスなものだと捉えているからだよ。
逆に考えるんだ。
「死んじゃっててもいいさ」と考えるんだ。
そうだ、まずは状況整理から始めよう。
まず周りは夜。
そして周りは森。
穴のすぐそばに自分のものと思われる目測1メートルくらいの新しそうな墓石あり。
周囲には他の墓石がいくつも並んでいる。
見た感じ周りの墓石は比較的古そうだ。
墓石には控えめな装飾と、名前らしき文字列とよく分からない文章

が彫り込まれている。
文字の形状は見覚えがない。
少なくともひらがなやカタカナ、漢字とアルファベットではないはずだ。
ふむふむ……。
次は自分を見てみよう。
控えめな装飾の、それでいて高そうな生地を使った簡素なドレスを着せられている。
自分の手の大きさや体格、足の長さから見るに、年齢は１０台前半と言ったところだろうか。
そして服装からして性別は女かな？
これが日本にいたときからの体なのか、それとも憑依転生のようなものなのかは分からないが、恐らくは後者だろう。
なんとなくだが、思考の仕方や知識が子供のそれとはかけ離れている気がする。
いかんせん記憶喪失のためはっきりとは分からないが、きっとこの体は他人のものなのだろう。
つまり自分は他人の死んだ娘の体を使っているわけだ。
……。
流石に罪悪感を感じるが、こちらも転生の被害者なわけだし許してほしい。
さて、これから自分はどうするべきなのだろうか。
そういえば棺の中で聞こえたあの声。
『《熟練度が一定に達しました。スキル〈怒〉を獲得しました。》』
あの声からすると、ここはゲームのような世界なのだろう。
そうすると、動く死体である自分は『アンデッド』になるわけだ。
そんな自分が人間に見つかったらどうなるか。
答えは簡単。
サンドバッグよろしくタコ殴りにされて日光だの浄化魔法だので滅却されるに決まっている。
これで今後の方針は決まった。

いつかこんなことにしてくれた下手人をぶん殴ることを夢見て、陰でこそこそ生き残ってみせる。
待ってろよ！　Ｄとやら!!
☆　Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　主人公　→　とある一匹の蜘蛛
☆
鑑定スキルが産廃性能だった以上、ここから先は自力で生き残らないといけない。
スキルポイント使い切っちゃったからね!!
はぁー。
こんな世界に蜘蛛として転生しちゃうし、せっかくとった鑑定も役に立たないし。
ないわー。

4　他言語って難しいよね

例の二人組が逃げ出した方向に人里があるのだろうと仮定して反対方向に向かってみることにした。
野生動物に襲われたらまずいと思いランタンは拾わずに置いてきたが、この体のおかげか、明かりがなくとも少し薄暗く感じる程度で済んでいた。
それでも生い茂る木々のせいで視界はあまり通らないけど。
時々聞こえる物音にビビり散らしつつしばらく歩を進めていると、少し広めの道に突き当たった。
舗装などはされていないがきちんと地面が均され、踏み固められている。
広さはトラックが通れるくらい。
わずかに溝ができているのは馬車かなにかが通っている証拠だろう。
方角的には二人組が行った方へと伸びているように見える。
反対側はどこに続いているのだろうか。
きっと足場の悪い森の中を歩くよりは体への負担が少ないだろう。
とりあえずこの道を辿っていくことにしよう。

しばらく歩き続け空が白んできた頃、大きな砦のようなものに行き当たった。
砦と言っても、見た目としては関所に近いような感じ。
大きい門があって、周りには門番らしき人物が居たり、見張り塔みたいなのがあったり。
少し疑問に思った点を挙げるとすると、森の中にポツンとあるため、町や村の門ではなさそうな点と、見張り塔が内側を向いている点だ。
……昔の偉い人は言いました。
『君子危うきに近寄らず、されど気になっちゃうからしかたないね』と……。

てなわけで何があるのか見に行ってみよう！
近づいてみると、鎧に身を包んだ門番さんが不審げな目を向けてくる。
この世界での人間との初邂逅だ、怪しまれないように振舞わなくては。
あの二人組は話した内に入らないからノーカンね。
まずは第一印象を決定づけるために元気に挨拶しよう。
「はろー、あいむふぁいんせんきゅーえんじゅー？」
「……＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊？」
「……君、こんなところに一人でどうしたんだい？」
わーおコミュニケーション失敗だ。
これは予想外。
そもそも使う言語が違った。
どうしたもんかな……。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊？　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
「とりあえずこっちにおいで。長い距離歩いて疲れてるだろ？　少し休憩していきなさい」
何を言ってるかは分からないが、手招きをしてるからきっと案内か何かしてくれるのだろう。
おとなしくご厚意に甘えるとしよう。
☆　Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　主人公　↓　とある門番　☆
「さて、と」
机を挟んで向かいの椅子に座った少女に目をやる。
服装からしてどこかの貴族や金持ちの娘だろうか。
「お嬢ちゃん。ここは知っての通りエルロー大迷宮の入口だ。そんなところへ一人で何をしに来たんだ？　それもこんな時間に」
少女は俺の言葉に首をかしげる。
少し考えるそぶりを見せた後、何も言わずに机の上の干し芋を口に運んだ。
口に合わなかったのか、しかめっ面をしながら咀嚼する姿を見て毒

気を抜かれる。
恐らくこの少女は迷子になったかなにかでここに辿り着いてしまっただけなのだろう。
昼頃に町まで送って行ってやるか。
そんなことを考えていると迷宮入り口側の外が慌ただしくなる。
微かにに聞こえる戦闘音からして、どうやら迷宮から魔物が出てきたようだ。
上層の魔物は大体が弱いが、もしものこともあり得る。
念のため俺も加勢に行くとするか。
「危険だからお嬢ちゃんはここで待っているんだ。いいね？」
少女の白い瞳が俺を射抜く。
感情がないような表情に一瞬寒気がした。
すぐに俺から興味を失い干し芋を見つめる少女を見て寒気が霧散するが、漠然とした違和感はぬぐい切れない。
軽く頭を振って考えを振り払い、俺は外へと向かうことにした。

5　腹ごしらえヨシ！　レッツスニーキングミッション!!

案内されたのは関所もどきに併設された休憩所っぽい場所だった。
仮眠室も兼ねているようで部屋の奥には二段ベッドがいくつも並んでいる。
「＊＊＊＊＊＊＊＊」
「そこに座るといい」
相変わらず言葉は分からないが、とりあえず門番さんが指さした椅子に腰かける。
少しすると皿に乗った干し芋を出された。
ありがたくいただくとしよう。
「＊＊、＊」
「さて、と」
門番さんが向かい側の席に腰掛け口を開く。
「＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊？　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
「お嬢ちゃん。ここは知っての通りエルロー大迷宮の入口だ。そんなところへ一人で何をしに来たんだ？　それもこんな時間に」
どうせ言っても伝わらないので首をかしげて言語がちがうよアピールを試みる。
伝わるかなぁ。
無理だろうなぁ。
とりあえずせっかく出された干し芋をいただこう。
……。
味がしない。
あれぇ？
味付けがないとかじゃなく、芋本来の味さえ感じない。
どうやら味覚まで死んでいるみたいだ。
聴覚視覚触覚嗅覚が働いているから気が付かなかった。

うーん、ショックだ。
とは言いつつも、そっかぁくらいの感傷しかないから、恐らくもともと自分は食に執着する人間ではなかったんだろうな。
思わぬところで生前の自分の人となりを知れた。
なんてことを考えていると、外から物音が聞こえてきた。
それを聞いた門番さんが小さくため息をついて立ち上がる。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊？」
「危険だからお嬢ちゃんはここで待っているんだ。いいね？」
何かを告げて去っていく門番さんの背中を眺めながら考える。
自分はどうするべきだろうか。
このままここで待つか、それともこっそり門の内側への侵入を試みるか。
まあ考えるまでもなく後者だよね。
気になるんだから仕方ないね。
それに好奇心は身を滅ぼすとも言うけど、どっちにしろここに留まってボロ出して正体がばれでもしたら、そのまんまの意味で身を滅ぼされることになるだろうし。
この部屋には扉が二つあって、片方は最初に入ってきた、門の外側に通じる扉。
もう片方は門番さんが出て行った、恐らく門の内側に通じている。
どっちから出るかが問題なんだよなぁ……。
門の外側に出れば今なら人もいないだろうし見つかる心配は少ないけど、どうやって内側へ入るかが問題になる。
壁を乗り越えてとかも行けるかもしれないけど確証がない。
《熟練度が一定に達しました。スキル〈思考加速ＬＶ１〉を獲得しました。》
また声が聞こえた。
この唐突に他人から思考に横やりを入れられる感じは慣れないな。
考えを戻そう。
門の内側に出た場合はそれだけで目標達成だけど、見つかる危険性がある。

……。
まあいいか！
今の自分は幼い少女だし、見つかってもちょっと怒られるくらいだろう。
それにどんなこと言われても分からないから痛くもかゆくもない。
そうと決まれば作戦開始だ。
こちら自分！　ただいまよりスニーキングミッションを開始する!!
☆　Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　主人公　↓　とある門番　☆
洞窟から出てきたエルローフロッグの処理を終え、休憩室へ戻る。
するとあの少女は姿を消していた。
部屋を見回しても二段ベッドを覗いてみても見当たらない。
「どうしたオリバー、探し物か？」
鎧の留め具を外しながら部屋に入ってきた同僚が俺に声をかけてきた。
「ああ、ちょっとな。ところでお前の腰よりちょい高いくらいの身長の子供見なかったか？　いいとこの嬢ちゃんみたいな格好してるんだが」
「誰との子だよ？　……そういや、カエル殴ってるときに誰かが迷宮ん中入ってったような気がすんな」
「なんだって？」
あんな子供が迷宮に一人で？
自殺行為だ。
やはりあの子は迷子ではなくここを目指して訪れたのだろう。
今すぐにでも探しに行かなくては。
子供を見殺しにするなんてごめんだ。

6　伝説の傭兵がダンボールを選んだ理由

音が鳴らないようにそっと扉を開ける。
キィー……ギッ!!
建付けが悪いィ！
しかしこの音に誰かが気がついて近づいてくる様子はない。
助かった。
そのまま覗き込むと、少し開けた場所で鎧を着た3人組が1メートル少しありそうな巨大なカエルと戦っていた。
ええ……？
さすがゲームのような世界だ、地球とは生態系がかけ離れていると見える。
それはともかく。
戦っているその向こうには、薄暗い洞窟が大きく口を開けていた。
あのカエルはきっとあそこから出てきたのだろう。
現に今も出てきてるし。
のそのそと這い出てきたカエルが、人間を見つけた途端機敏に飛び掛かる。
ヒェ……
あのサイズのカエルにのしかかられたら流石にひとたまりも……。
あっ、普通に盾で殴り飛ばされた。
案外あのカエルは弱いのかもしれない。
……まあそんなことはどうでもいい。
気になるのは、何故洞窟をこんな厳重に警備しているのかだ。
巨大カエルが出てくるからというのも理由の一つにはありそうだが、今さっき盾で殴り飛ばされたカエルが、そのままの勢いで壁にぶつかってからピクリとも動かなくなっている。
よっわ。
つまり、あのカエル達はなんら脅威ではないというわけだ。
そんなもののためだけにこんな砦じみたものを作ったというには余りにも根拠が薄いだろう。

ということは、だ。
あの洞窟には何かもっと大きな秘密があるのではなかろうか。
……気になる。
第六感が囁いている。
「あそこなんか面白そうじゃね？」と……。
そうと決まれば潜入だ！
手ごろな場所に置いてあった空の木箱をひっつかみ、被る。
このまましゃがむことによって体が一切見えなくなり、ただの木箱に同化することが出来る。
これぞ伝統的な潜入スタイル。
元ネタ……じゃなかった、先駆者はダンボールを被りスニーキングミッションに赴いたというが、木箱もそう大差ないだろう。
さあ、出発（でっぱつ）じゃあい！

すみませーん店員さーん！　この木箱重いんですけどー！
ふんぐぎぎぎぎ……。
……ふひい……。
ずりずりと木箱の端を引きずりながらなんとか洞窟手前までたどり着いたものの、限界が訪れた。
重い木箱を背負いながら変な体制で５０メートルほど進んだためか、体中が痛い。
こりゃあ明日は筋肉痛だな。
さて、ここまで来たは良いが、カエル対人間の戦いが終わってしまった。
木箱の隙間からてんやわんややってる隙を見てここまで来れたものの、流石に平常時には動く木箱を見逃さないだろう。
どうしたものか……。
……おや？
鎧姿三人衆がカエルの肉を集めながら撤収し始めた。
……今だッ！

今は三人ともカエルの残骸くらいしか目に入っていないッ！
このタイミングだッ!!
木箱を脱ぎ捨て、洞窟に向かって走りだし……。
「あっ」
タイミング悪く三人のうちの一人と目が合った。
なるほど、驚いたときに出る「あっ」は言語が違っても共通なんだなあ……。
……現実逃避してる場合じゃなかったわ。
こんな格言を知ってる？
『三十六計逃げるに如かず』ってなぁ!!
☆　Ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　主人公　↓　とある兵士　☆
「おっと……っとぉ！」
唐突に飛び掛かってきたカエル野郎を思い切り殴り飛ばす。
「大丈夫かマルコ！」
「おうよ！　ばっちりだぜ！」
心配性の同僚に軽口を返しながら目の前のカエルを引き裂く。
にしても最近カエルだのタラテクトだのの数が多い。
そういやこの時期はクイーンタラテクトの産卵があったか？
ああ、それで逃げてきやがんのか。
ったく、迷惑な話だよなぁ。
「勘弁してくれよ……せやっ！」
カエルを切り払い洞窟に目をやる。
どうやらこれ以上出てくる気配はなさそうだ。
「今日はこれで店じまいみたいだな。マルコ、ホセ、肉持って引き上げるぞ」
「あいよ」
「了解」
ったく、何が悲しくてこんな砂まみれの肉を拾い集めなきゃいけねえんだか。
カエルの肉は割とあっさり目な味で、地味に人気がある。
味は鶏肉に似てるらしい。

まあ俺は食う気にならんが。
なんであんな見た目のやつの肉を食う気になるのか俺には到底理解できん。
それでも売ればちょっとは小遣いになるってんで集めさせられてるわけだが……。
……？
あんなところに箱なんぞ置いてたか？
ん？
あの箱なんか動いて……。
「あっ」
目が合った。
１０歳ちょいくらいの、綺麗な身なりの子供だった。
なかなか珍しい、白い瞳の子供。
俺と同時に声を上げたそいつは、気まずそうな顔をした。
にしてもなんでこんなところに？
オリバーかホセの子供か？
あいつら独身だって言ってやがったのにいつの間にか抜け駆けしやがってぶっ殺殺殺……。
……ありゃ、あのがきんちょエルロー大迷宮に入っていきやがった。
……まあいいか。
危険感じたらすぐ帰ってくるだろ。
そしたらこっそりとどっちがパパなのかでも聞いてみっかな。